

クラスを超えた学び合い
—留学生日本語クラスと日本人学生英語クラス間交流—

坪田典子・野沢智子

Learning from Each Other beyond the Class
—Interclass Communication Activities
between Japanese and International Students at Bunkyo University—

Michiko TSUBOTA, Tomoko NOZAWA

Abstract

This paper is about the interclass communication activities between a Japanese language class, Nihongo C, and an English language class, CALL102, conducted at Bunkyo University in the 2003 fall semester. The purposes of the communication activities were not only to enhance the communication between these two classes, but also to give the students an opportunity of mutual learning. The main activities were for the international students to visit the English class and make speeches in Japanese and for the Japanese students to write their own essays in English stimulated by these speeches. The paper describes the activities precisely, showing how the students' attitudes towards learning their target languages changed through the encounter with each other. After analyzing the data from the comments of speech evaluation and essays by the Japanese students, and from the impressions and essays by the international students, some attitude changes were observed. The changes were found in awareness towards self-identity and own culture, foreign language learning attitudes, and cross-cultural understanding. Moreover, each participant learned from each other even beyond the class in this unique trial. In the end, the possibilities in interclass communication between the Japanese class and the English class, and issues in promoting the interclass communications are discussed.

I 問題の所在

グローバル化の進展に伴って、政治、経済、文化から日常生活にいたるまで、様々な分野、場面で諸外国・地域との交流がますます盛んになってきており、高等教育もその例外ではない。そのような中で日本における外国人留学生は、1983年の「留学生受け入れ10万人計画」（21世紀への留学生政策に関する提言）以来増加し、2003年には10万人を突破するなど、その数は21世紀に入って飛躍

的に増加しており、今後さらなる増加が見込まれている¹⁾。

多くの大学が積極的に留学生受け入れを進めてはいるが、留学生と在留大学の日本人学生との接触・交流に関しては、同じキャンパスにしながら、「相互の接触が非常に少なく、物理的に乖離している状況」[横須賀2003:29]にあり、自然発生的には交流が生じにくい現状が報告されている。

そうした中であって、留学生の多くは日本人学生との交流を望んでおり、日本人学生の多くも留学生との交流に関心を持ちながら、接触・交流がなされていない現状にある²⁾。また、「大学が適切な交流の機会を提供していないからこそ、多くの学生が消極的レベルに留まっている」ことも指摘されており[花見1999:5]、「相互理解の生起する仕掛けを作る必要があるし、仕掛けをつくるのを助けるシステムが必要」とされる[箕浦2000:13]。大学は高等教育機関であり、その主要な場は「教室」である。しかしながら、「教室」は、留学生と日本人学生の交流の場としてはほとんど機能していないことが報告されている。「教室」は、「留学生と日本人学生が一緒に受講するので、異文化交流が日常的に行われているように思われるが、実際の授業の多くは、異文化交流を目的としていないし、日本の授業の多くが教師から学生へと一方通行に行われ、学生間で交流する機会はあまり多くない。」[坪井1999:67]³⁾

このような現状を踏まえて、本稿の執筆者たちは、留学生のスピーチ活動を留学生と日本人学生との交流のなかに位置づけ、授業の中で何ができるかを検討した。そして、学生の出席が義務づけられている「教室」の特質を生かして、留学生と日本人学生が協同で学習する場を設け、クラス間交流を試みた。本稿のもととなる実践は、留学生の日本語クラス（以下、留学生クラス）と日本人学生の英語クラス（以下、日本人クラス⁴⁾）の間で行われたクラス間交流である。具体的な活動は、留学生が日本人クラスを訪問して日本語でスピーチを行い、質疑応答するという直接の対面活動を核としてなされた。核となる活動のほかに、その事前・事後活動を含め、1学期間を通して行われた。事後活動は、双方の学生たちが書いたコメントや感想、エッセイ等のテキストを読むことを介して行われ、その一部は、インターネットを介してなされた。

このような異文化インターフェース⁵⁾を目指すクラス間交流の試みは、既存の授業の持つイメージと異なっていたため、双方の学生たちに新鮮な刺激を与え、協同の活動を活発にし、クラスを超えた学び合いを可能としていった。本稿は、このクラス間交流を紹介し、留学生と日本人学生間の交流の可能性を、学ぶ主体である学習者という観点から、また、クラス間の交流の可能性をインターフェースとしての授業という観点から分析し、考察を加えたものである。

1) 文部部科学省ホームページ、H15年12月16日、中央教育審議会「新たな留学生政策の展開について (3)新たな留学生政策の基本的方向」(答申)、および、「留学生の推移」を参照。留学生数は、1983年以降増大し、一時1997、1998と減少したが、その後は再び増加し、1999年に5万人を突破して以来急増しており、2003年5月には10万9508人を記録して現在に至っている。

2) 両者の交流がないことについては[横須賀2003:28-29]、[箕浦2000:11]や[花見2003:2]等、また、日本人学生が留学生に関心を抱いている点については、[高松2000:15]や[箕浦1998:103]等を参照。

3) 坪井は留学生と日本人学生との交流の場として、「教室」「大学キャンパス」「宿舎」「地域社会」の四つを挙げており、オーストラリアの事例と比較している。[坪井1999:67-69]

4) 日本人クラスには、実際は1名の留学生が在籍しているが、留学生と日本人学生との交流の視点を重視するため、本稿では、当該留学生を含めて、便宜上、「日本人学生」、「日本人クラス」と呼ぶこととする。

5) 本稿において、異文化インターフェースとしてのクラス間交流とは、留学生と日本人学生が相互作用のもとに、協同のプロジェクトを達成していくプロセスにおいて、共に学び合うことを前提とした授業のことを指している。

II 先行研究と本稿の位置づけ

留学生と異文化交流をめぐる従来の研究は、異文化コミュにケーションや異文化適応など相互作用の過程で発生する問題や、政策・制度面での問題を議論するいずれの場合においても、留学生もしくは留学という現象自体が対象とされてきた。近年の傾向として、留学生問題は受け入れ側の問題という認識が広まり、日本人学生や日本人あるいは日本の組織を対象とする研究や両者の視点からなされる研究が増えてきている⁶⁾。

本稿は、授業における留学生と日本人学生との交流実践に基づいている。授業での実践にもとづく研究の大半は、留学生と日本人学生の多文化混成クラスにおける授業を扱ったものである。そのような混成クラスでの多文化プログラムの科目の一環として行われる授業に基づいた研究としては、[田崎敦子2003] や [横田雅弘1998]、[梶原綾乃2003] [高松里2000] 等々があり、そこでは、交流を視野に入れて、「留学生と日本人学生間の異文化体験を教育の素材としてとり入れ」、実践と研究と教育との連関をはかる授業の試みがなされている⁷⁾。

一方、留学生を対象とする日本語クラスにおける交流に関する研究は、留学生クラスに日本人学生の参加を要請したり、日本人学生との交流を実践したりする混成クラスを作る必要があるため、数が限られてくる。その研究も、条件が整わないため一回限りの単発授業における実践に基づいた研究にならざるを得ない⁸⁾。まして、日本人学生対象のクラスからの交流実践に基づく研究は、管見の限り見当たらない。

その上、留学生と日本人学生の交流を扱うこれまでの研究が、両者の相互交流を対象としていたのに対し、本稿では、学生間の相互交流のみならず、クラス間の交流（日本語教育プログラムと英語教育プログラムのクラス間交流）にも焦点を当てており、留学生と日本人学生のインターフェースをどのように構築していくことができるのかを追求しているのが特色である。

留学生と日本人学生の相互交流・理解についても、これまで、学習者の学びという視点は提出されているが（[得丸2000:54] [箕浦1998:98]）、留学生と日本人学生の両者の「学び合い」によってなされるという視点からは取り上げられてこなかった。本稿では、相互作用の中で生起する情動的な内的プロセスを重視し、交流が両者の学び合いの中で行われることを考察している。

III 授業の実際

2人の担当教師によってCCC（Cross-Cultural Communication）Project⁹⁾と名づけられたクラス間交流の試みが、留学生の日本語クラスと日本人学生の英語クラスとの間で行われた。交流は、一回限りの単発授業に終わることなく、毎回留学生2名が日本人学生クラスに出向いて計4回、4週にわたってスピーチをするという活動を核に、双方のクラスで、その事前、事後活動が学期を通して行われ

6) 「留学生問題は日本人問題」とする認識が広まって、受け入れ側に焦点を当てた研究が多く出るようになったのは、箕浦らの『日本人学生と留学生：相互理解のためのアクション・リサーチ』以降とされている。[箕浦2000:10]

7) [横田1999:15-6] [花見2000:54] 参照。

8) 会話パートナーとしての日本人学生の参加を扱った[杉山2001] や、日本語と英語を併用する体験学習を日本語プログラムの授業として行う意義を考察した[井之川2003] 等がある。

9) 留学生と日本人学生との「異文化」横断的、および、留学生クラスと日本人クラスとの横断的という意味を含めてcrossという語を使用している。

た。留学生のスピーチのトピックは〔表 3-1〕に記す。

〔表 3-1：留学生のスピーチ〕

	Presenter 1	Presenter 2
10/31	日本語について感じたこと (X.F.)	留学生生活について (H.J.)
11/7	日本人の宗教観 (L.L.)	日本に来て感じたこと (K.P.)
11/14	日本人と中国人の食事のマナー (P.J.)	日本女性とタバコ (G.H.)
11/21	日本の食べ物 (J.C.)	読書の天国 (Z.M.)

対象となるクラスは、ともに2003年4月入学の1年次のクラスで、実施時期は第2セメスター（2003年度秋学期）である。留学生クラスは日本語Cの1クラスで、1年次、2年次、3年次の留学生が在籍していた。日本人学生クラスはCALL102の2クラスである。日本語Cは火曜日と金曜日の2時限に週二回行われ、英語CALL102は金曜日の1時限（CM2）と同2時限（CM6）に行われている。両者の共通時間帯をとって、クラス間交流には金曜日の2時限目が当てられた。なお、1時限目の英語クラスとの交流は、時間的に可能な2名の留学生が直接当該クラスへ行ってスピーチを行ったほかは、ネット上において、後述する形で交流が行われた。

日本語Cでは、スピーチ活動は春学期にも行ったが、秋にはクラス内でやるだけではなく、聴衆としてネイティブの日本人学生の参加を検討していた¹⁰⁾。これに対し、授業が同じ時間帯にあるCALL102側では、留学を1年後に控えた学生に対する刺激として、留学生のスピーチを聞くことに意味があると考え、授業時間の一部をクラス交流にあてることを申し出て、クラス間での交流が実現した。

留学生と日本人学生のクラス間交流は、双方の授業時間に負担をかけないようにという配慮をしながら、当初、留学生クラス側は「ネイティブの日本人学生の前で日本語でスピーチをする」、日本人クラス側は「留学生の日本語スピーチを聞いて、英語でエッセイを書く」という活動に限定して始めた。計画段階では、英語クラスは授業開始直後のごく短時間をこの活動に充てる予定で始めたが、日本人学生が留学生のスピーチの内容とデリバリーに興味をもち、質疑応答がさかんに行われた。その結果、2名分のスピーチと質疑応答時間に評価の時間を含めて、約30分が費やされ、さらに、事前・事後活動を含めて一学期にわたる活動となった¹¹⁾

Ⅲ－1 対象となるクラスの概要

留学生日本語クラス、日本語C

日本語Cは、2セメスターに開講される留学生を対象とした日本語の必修科目である。留学生は、春学期に日本語Cの前段階に当たる日本語Aと日本語Bをすでに履修しており、日本語の理解・使用能力および日本語を使用したコミュニケーション能力は春学期と比べて上達している。留学生は、情報学部1名、国際学部7名の計8名であり、出身は中国、韓国、台湾である。日本人学生が高校卒業後、社会経験を経ないで大学に入学しているのに比べ、留学生は社会経験を経た後に日本へ留学している

¹⁰⁾ 日本人学生の参加を検討するに至った経緯には、一つには、留学生が日本人学生との交流を望んでいるという留学生側の条件（留学生担当教師が留学生から直接得た情報に基づく）、二つには、留学生のスピーチにネイティブで同年代の日本人学生の参加を求めることによる活動の活性化への期待、三つには、留学生クラスの活動に日本人学生の参加を要請するシステムがないという事情があった。

¹¹⁾ 両クラスとも他に進めていた活動も多く、学生たちには負担が大きくなってしまった。結果、両クラスにおいて最後の課題であるエッセイの指導に時間をかけられなかったことは反省事項である。

ケースが多い。

「日本語C」は日本語の総合的な能力の養成を目標とした科目で、日本語の理解力と表現能力の向上を目指すとともに、自己表現をすることを旨とする取り組みを行った。活動内容は、1. 自己認識をめざしたタスクとエッセイライティング 2. VTR教材を使用した自己表現活動 3. スピーチとエッセイ・ライティング 4. プレゼンテーションとアカデミックライティング 5. その他、基礎学習として日本語の文法や読み・聞き教材の内容要約等を行い、学習者の自律を促すため当該学期における日本語学習の到達目標を各自が設定して参加した。

日本人英語クラス、CALL102

CALL102は、国際学部国際コミュニケーション学科必修の英語科目でCALL教室を利用した授業のひとつである。受講生は春学期にCALL101をすでに履修しており、両クラスとも参加者は19名である。

インターネット接続されたCALL-Computer Assisted Language Learning = コンピュータ支援言語学習環境-の6226教室を利用して、英語を使って自己表現をすることとインターネット上でのコミュニケーションを通じて異文化に触れることを目標とした。活動内容は、1. クラス掲示板でのクラス内コミュニケーション 2. インターネット上での無料のディスカッションボードサービスNicenetを利用したロシア人あるいは当該担当教師の他大学の学生と交流をするコミュニケーションライティング 3. 留学生のスピーチを材料にしたエッセイライティング 4. 以上の活動と日記や自分の興味に応じた内容を中心としたホームページの作成であった。5. その他として、学習者の自律を促すため、授業内外の英語学習を記録、内省するClass Participation Journalを英語あるいは日本語で記録していた。このJournalをもとに、最終授業で自分にふさわしいGradeを根拠をあげて申請した。

Ⅲ-2 交流実践の手順

スピーチは、2003年後期の10月31日から11月21日の4週間にわたって、毎週一度、毎回2名づつ計4週間にわたって4回行われた。留学生全員が日本人クラスを訪問し日本語でスピーチを行い、日本人学生がそのスピーチを評価しコメントをする対面の活動を核とし、それぞれのクラスで事前・事後にわたる活動が行われた。

事前準備として、CCCと名づけた今回の活動の意義について各ホームクラスで説明し、留学生はスピーチを準備した。スピーチのテーマは、日本人学生との交流を視野に入れて、留学生が日本や日本文化について思ったり考えたりしていることをとりあげることとし、トピックは各自自由に選んだ。留学生は事前活動として、スピーチ原稿を書く指導を受け、交流に先立って別のトピックでホームクラスにおいてスピーチを行っている。クラス間交流における留学生のスピーチのトピックについては、[表3-1]に記す。

スピーチ活動の手順は[表3-2]に示す通りである。毎回2名づつ日本人クラスに発表予定者が赴き、担当教師の紹介を受けてスピーチをした。スピーチの後に質疑応答をし、その場で留学生と日本人学生の双方が応答するというリアルタイムで対面の応答活動が行われた。スピーチと質疑応答はテープに録音して反省材料とした。

日本人学生は発表後、コメントを書き、点数評価する、留学生はスピーチの感想を日本語で書く、そして、各々のクラスの最終課題としてエッセイを書くというのが手順であった。スピーチ後のコメ

ントを書く際の日本人学生の使用言語は、当初の予定では英語であったが学生の意見により自由にしたところ、ほとんどが日本語で書いた。英語ではなく日本語で書かれたことは、日本人学生にとってはスピーチを聴いた気持ちや意見表明をすることを容易にし、留学生にとっては日本人学生の気持ちを汲み取ることを容易にして、スピーチ後の双方の距離を接近させていった。

最終回のスピーチが行われた日には、昼食時間を利用して3クラスの学生が集まる機会を持った。昼食時間に留学生クラスの教室へ日本人学生が赴くという形で会談しながら共に食事をする時間を持った。英語クラスから参加者は留学生1名を含め各クラスから2名ずつ4名が参加した。留学生クラスからはほとんどの学生が参加し、当該クラス以外の日本人学生の参加もあった。

事後活動は、留学生と日本人学生が対面で行うスピーチのように時空間を共有した活動ではなく別の形態で行われた。その一つは、スピーチ後に日本人学生が書いたコメントを、留学生が読んで、スピーチの感想を書くという形態の相互作用であり、書かれたテキストが媒介となっているので、[表3-3]では「テキスト交流」と記している。

もう一つは、ネットを媒介とした活動で、[表3-3]では「ネット交流」と記している。日本人学生クラス担当教師のホームページに、留学生のスピーチ原稿や感想が掲載された。日本人学生がエッセイを書くときのためや、授業時間の関係で留学生全員のスピーチを実際に聞くことができない1時間のCALL102（CM2）クラスのために、ネットが活用された。また、留学生にとっては、パブリケーションされた自分たちの原稿や日本人学生のエッセイにアクセスして自身のエッセイを書くために使用された。

なお、[表3-3]の「対面交流」は、今回の交流の核となる活動で、上述した直接対面の交流を表している。

[表3-2：クラス間交流の手順]

1	留学生が日本人学生のクラスを訪問しスピーチを行う
2	留学生と日本人学生が質疑応答を行う
3	日本人学生がコメントを書き、留学生がそれを読んでスピーチの感想を書く
4	留学生のスピーチ原稿と感想が、日本人学生担当教師のホームページに掲載される
5	日本人学生がホームページ上の留学生のスピーチ原稿と感想を読んで英語でエッセイを書く
6	日本人学生のエッセイが日本人学生担当教師と日本人学生各々のホームページに掲載される
7	留学生がホームページ上の自分の原稿と感想、および日本人学生のエッセイにアクセスして、エッセイを書く

[表3-3：クラス間交流の諸相]

留学生		日本人学生	交流の形態
スピーチをする	⇔	スピーチをきく	対面交流
質問に回答する	⇔	スピーチに回答する	対面交流
コメントをよみ感想をかく	⇔	コメント・評価をかく	テキスト交流
hpにアクセスしてエッセイをかく	⇔	感想・原稿をよみエッセイをかく	テキスト交流・ネット交流

IV クラス間交流 —学生データの—

本章では、留学生が書いたスピーチ後の感想とエッセイ、日本人学生が書いたスピーチ評価の際のコメントとエッセイ等のすべてをデータとし、テープデータとともに分析の対象としている。本稿では、これらクラス間交流で得られた学生のデータから、「出会いと受け入れのプロセス」、「変容のプロセス」、「学びのプロセス」という三つのプロセスを分析の際の枠組みとしている。学習する主体である留学生と日本人学生が、スピーチ活動を通して、両者の相互作用によって引き起こされる反応や気づき、発見等をどのように体験し、概念化し、認識していったのかという内的プロセスを重視して、両者の学び合いという視点からみていくためである。

データの引用に際しては、留学生クラスの留学生は（留）、英語クラスの日本人学生は（日）と記し、その後に個人を表すアルファベットを記入している。引用中の（ ）内は担当教師による。なお、意味が通じる限り、引用は原文のまま記すこととする。

IV-1 学生たちの異文化交流

留学生日本語クラスでは今回のスピーチ以前にも、前学期にスピーチ活動を何度か行っている。初回のスピーチ時には、留学生クラス内であっても他者の前でスピーチをするという活動への不安と緊張から、スピーチの続行に支障をきたすものもいた。人前で何かをすることには緊張と不安がつきまとうのが常である。それが今回は、ホームクラスを出て、しかも学習言語である日本語のネイティブの前で行うということに対する不安と抵抗が加わった。その点はクラス間交流を行う前の留学生たちの反応にもみられたし¹²⁾、スピーチ後の感想のなかにも書かれていたが、スピーチをした後はそれが、一つの仕事をしたという充実感に変わっていく。

学生たちの相互の学び合いのプロセスを次の順番でみていく。まず、留学生たちの自己表現としてのスピーチ活動がなされ、日本人学生との出会いを、IV-1-1の「出会いと受け入れのプロセス」で、次に、両者が相互に応答し合うことを通して学生たちがどのように変わっていったかをIV-1-2の「変容のプロセス」で述べる。この二つは、両者が対面するスピーチ活動の現場から見えてくるものである。最後に、その現場を離れ、授業を超えた学びをIV-1-3の「学びのプロセス」で述べる。

その前に、学生たちの交流の現状をみておく。留学生と日本人学生の交流が同じ大学内にいてもほとんどなされていないという点は、Iでも言及したように多くの研究によって報告されているが、クラス間交流を行った学生たちにとっても例外ではなかった¹³⁾

IV-1-1 出会いと受け入れのプロセス

心配や不安が充実感に変わるのは、ひとつの仕事を成し遂げたという達成感によるところが大きいが、それは他者の反応に大きく左右される。聴衆である日本人学生の反応を留学生がどのように感じたか、留学生の発表前後の気持ちの変化からみていく。

¹²⁾ クラス間交流の提案に対し、留学生からは、日本人学生の前で、しかも同じ一年次の顔見知りの学生の前で、十分ではない日本語でスピーチをすることに対する抵抗が示された。

¹³⁾ 一例としてスピーチ後のコメントに、「留学生とは学校と一緒に授業を受けたりはしているけど、めったに話す機会はありませんでした。…CMには二人しか来れなかったのが残念です」（日）とある。

受け入れる・受け入れられる

とりわけ初日にスピーチを行った留学生は、活動自体が初めての経験であったので、後続の留学生たちよりも余分な緊張を抱えていた。それは、最初にスピーチをした二人の留学生のみならず、スピーチが行われている間、残った他の留学生たちの間においても共有されていた感情であった。また留学生担当教師においてもそのことは例外ではなかった¹⁴⁾。次はトップバッターの留学生とその留学生の態度を受け止めた日本人学生の反応である。

(留XF) 今回の発表は日本人の学生の前で行われた。発表の前日は、かなり緊張して、何十回も暗記して、その緊張感をもって、そのまま寝た。本番の日が来た。緊張したまま、このスピーチが終わった。終わった瞬間に、ほっとした。初めて日本人の前で発表して、こういう結果が出て、自分に満足している。今回の体験は本当にいいチャンスだと思っている。これから、自分に自信を持って頑張りたいと考えている。

(HRS) すごく緊張してるのがつたわった。

(日MK) He spoke very good. 一生懸命さがつたわかりました。

スピーチをした後の留学生の反応は、スピーチ前と一転している。それは、日本人学生がスピーチをする留学生をそのまま、あるいは、留学生の気持ちになって¹⁵⁾、受け入れたからである。受け入れられることを通して、次に留学生が日本人学生を受け入れる。そこに、相互に受け入れ・受け入れられる関係ができ、そのことを学生たちが共に意識し合いながら、お互いが応答し合うという関係がスピーチをめぐってつくられていった。交流の場を共に体験した英語クラス担当教師が当初の予定を返上して応答の時間を延長したのもこのような理由による。続けて、留学生の発表前後の気持ちの変化を追っていく。

(留KP) 結構楽しかったです。皆さんの質問もおもしろかったです。初めて十何人ぐらいの日本人の前にスピーチしていた。いい経験と思う。でも発表前に本当に緊張しました。(感想1)

日本人の前でスピーチする事は初めてで、もちろんピンピンです。日本人と一緒に交流できていい経験だと思います。スピーチが終わるとき日本人がいろいろの質問を出してあの時も緊張しました。でも日本人のまえでスピーチをする事は恥ずかしいと思います。(感想2)

(留LL) スピーチをする前はとても緊張して、心配していた。緊張といえば、あのような時は、誰でも当たり前気持ちであると思う。留学生として、初めて全員日本人の学生の教室で発表して、もちろん緊張していたから。それと同時に、自分の日本語は大丈夫か、話すテーマは日本人の学生に興味があるか、特に、宗教について話すのはとても微妙なので、他の学生はどのような反応をするか等々、いろいろな問題を心配していた。しかし、発表したあと、そのような気持ちは全然残っていなかった。そのことは、みんなが書いた意見を見ると、すぐ分かった。みんなが書いてくれた宗教に対する意見には、本当に感動した。

¹⁴⁾ 訪問スピーチ後にトップバッターの二人がホームクラスへ帰ってきて感想を語ったときは、クラスの他の留学生も教師も共に緊張がほぐれ、ほっとした瞬間であった。(担当教師の記憶より)

¹⁵⁾ 相手の気持ちを押しはかっている例として、「きっとドキドキしてるはずなのに落ち着いた感じに発表できてすごい！！と思った！！」(HMN)

IV-1-2 変容のプロセス

留学生にとっては、日本人学生の前でスピーチをすることも、スピーチを聴いて応答する日本人学生の反応に答えることも共に初めての経験であった。日本人学生にとっても、それまでは留学生とほとんど交流がなかったので、留学生のスピーチを聴くことも、それに応答することも、留学生同様、初めての経験であった。ここでは「変容」のプロセスを、「違いへの気づき」「当然でなくなる気づき」「自己・自文化への気づき」の三つに分けてみていく。

違いへの気づき

(日DS) 個人的にはかなりよかったですと思います。考え方の違いを知ることは国際学部の学生としてかなりいい刺激となると思うからです。

(日AN) This time, I was gave a good chance by CCC so I could know culture gap and I listen to other country's opinion again.

(日MT) I heard a foreign student's talk and was surprised at the difference in a custom, culture, or a living environment. …

(日YO) It is fun that we are aware of these foreign table manner, when we take a meal from here on out.

(日UO) I read their text and I thought that it would become an experience good for myself to touch the culture of other countries. When I was also in other countries, I touched the culture of the country and wished to feel the difference in culture from experience

「当然」が当然でなくなる気づき

(日MY) 発表を聞いて、私たちが普段気にもとめていないことを疑問に感じたりしているのを聞いて驚きました。CM2には二人しか来れなかったのが残念です。

(日MK) (日本について留学生が発見したことを聞いて、) We live in Japan for a long time but I couldn't find that.

(日AK) 日本人が気がつかない部分を的確についてきて、とても納得でき、説得力のあるスピーチでした。

(日TU) 普段何気なく会話していることが、外の国の人が見るとこうなるのかとおどろきました。

「どうも」という言葉をこんな深く考ええたことがありません。非常におもしろい内容だった。

(日DS) 自分でも気づけなかった分でも気が付かなかった日本語の特長をよく観察していると思いました。

自己・自文化への気づき

(日TU) ある宗教を信じてる人から見ると、日本人が変なのかと思うとそれもまた不思議でした。

(日TO) たしかに日本人は酒を飲みすぎているし、日本人の私から見てもひどいと思う。適度にするべきであろう。私たちはこういう光景が当たり前という中で育ってきたので、改めて指摘されると、はっとする思いがする。

(日KM) If it sees from the man of other countries, it may be thought it is strange.

(日AN) 留学生の視点から見た日本について知ることができ、日本を見直すことができた。

（留GH）自分の意見を述べることは、こんなにいいんだなあと思いました。日本に来てから久しぶりに自分の考え方を言いました。いろいろな利害関係があるから、自分の考え方とか自分の習慣が言えなくなってしまいます。

「違いへの気づき」「当然でなくなる気づき」「自己・自文化への気づき」、これらのプロセスは、日本人学生にとってはもちろんのこと、留学生にとっても日本人学生とは別な意味でそれまでとは違う自己を感じるプロセスであった。

Ⅳ－１－３ 学びのプロセス

学生たちは共に語学のクラスの学生であるが、交流を通して学習と異文化理解に関してはどのような反応が出てきたのだろうか。

外国語学習・異文化理解

（留PJ）今回のスピーチが日本語の勉強にとってはひとつの経験だと思う。このようなことをやったから、自分がどこでまだ足りないのかが見つかった。スピーチのあと、質問されたとき、わからない言葉があったので、やはり本を読むことが不足だと思った。これからもっと勉強しなければならないと思っている。

（留ZM）今回のスピーチはほんとにいい勉強になりました。正直に言えば、日本に来てから初めて日本人の前でスピーチをしました。すごく緊張していいスピーチができなかったと思います。緊張したので今回のスピーチでは日本語の発音が崩れたと思います。…次回はいいスピーチができるようがんばりたいと思います。

（留GH）現場での質疑応答などのやりとりによって、日本の学生がもっと私たちを知ることができるようになったのではないかと思います。私はこの交流を通して、外国人が日本語を学習することが国際交流の手段となることがわかりました。

（日NH）日本に強く興味があるという姿勢がうかがえて私も頑張ろうと思った。

（日KF）国際学部なのに他の国の人たちとコミュニケーションとる機会があまりないが、CCCのおかげで、異文化理解ということが身近に感じられた。また、発表する側も日本語の練習にもなるし、もし私たちが発表者の立場になることもなれば私たちの英語も上達できたのではと思った。

（日AN）I got stimulus by CCC. First, I am very surprised at the students of CCC when I heard their announcements because they talk Japanese fluently. But they have learned Japanese only few years. So I thought that I should study English more and more.

（日AK）とても日本語がうまいので驚きました。しかも1年3ヶ月しか勉強してないなんて…すごいです。

交流の成果の一つは、交流によって刺激され、自己を振り返ったり自己の学習レベルを内省したりして、学習への動機づけが高まることである。日本人学生の側は、自身の英語学習歴と比べて語学学習歴が短い留学生の「上手な」日本語とその内容に驚き、留学生を外国語学習と留学の成功者として受け止めた。また、国際交流や異文化理解が自分たちの身近にあることを感じている。

留学生の経験と自己への投影

(日TU) 日本語と韓国語が似ているという事を聞いて、韓国に親近感を感じました。もし自分が留学したら、彼と同じような苦労を味わのかなあと思いました。がんばってください。

(日YO) I go abroad this year from September to December. I am afraid that I won't socialize with American student. I will feel lonely and I will want to meet my family and my friends. But this experience is important for my future. I think studying abroad is short period. So I may not be going to learn. But I expect this experience to give me some new point of view.

日本人学生にとっては、短期留学を一年後に控えているという事情があったため、留学生の経験を一年後に留学する自己へと投影して受け止めていた。

授業を超えて

クラス間交流は、授業という範囲を超えて、もっと交流したいという交流への積極的な気持ちを促す。

(留GH) 今回の交流を通じて、お互いに日本のこと、それから私たちの国のことをもっと知ってもらいたいと思っています。

(日AK) 留学生の視点から見た日本について知ることができ、日本を見直すことができた。もっとCCCの人たちと仲良くなれたらよかった。

(留ZM) 今回のスピーチがきっかけで、日本人の学生は留学生のことに興味を持っているらしいと実感しました。ぜひ、友達になってください。

さらに、留学生と日本人学生との出会いと交流は、別の他・多文化の存在を感じ、授業を超えて、異文化交流についての認識や、さらに発展して新しい認識への土壌を育むことへも繋がっていった。

(日MH) 今回は中国の留学生が多かったけど他の国の人から見た日本を知ったり、良い・悪いとことを知ることで他の文化を知りたいという気持ちが強くなった。

(留PJ) 異文化交流においては、相手の文化を進んで理解しようとする姿勢が大切である。…相手にもまたこちらの文化について理解してもらわなくてはならない。…ただ知るだけではなくて、理解すること。努力した結果、やはり理解することはできなくても、理解しようと勤めることが何より大切だと思う。こちらが積極的に、相手側についてそうした点の努力を向けていることに気づいてもらえれば、それはすなわちそのまま「あなたとコミュニケーションを取りたいのだ」という意思表示にもなりえるため、お互いの関係を良好なものとするのに役立つだろう。

(留HJ) 今回のスピーチで、異文化理解に関して違う国の人々の生活、価値観の違いを学ぶということは、同時に、私たちが自分自身、自分の文化を考えてみる良いきっかけになったと思う。そして何よりも、一つの文化や社会の中でも、いろいろな価値観を持っている人々が一緒に存在する。私たちの異文化理解を促進するという事は、生徒自身が今生きている社会・文化の中にいる人々を理解することにも関係あると思う。このようなことから異文化交流ははじまるんじゃないかと思った。

(日YU) "They are treasures" It is wonderful to study different culture. Because it is going to understand each other. It is wonderful to understand partners. Because the world can be unified. It is

wonderful that the world unifies. Because peace visits in the world. They are a part of them. They are the treasures in the world. I want to become a part of it.

Ⅳ－２ 総括

外国で生活することは、それまで形成されてきた価値観や習慣が通用しない現実に関し、それらを調整しながら生きていくことでもある。日本という外国で生活している留学生にとって、この経験は生活の中で日々経験していることであり、自分たちのそれと違うからスピーチのトピックになる。

そのような留学生の経験の一端を知ることは、日本人学生にとってそれまで当然とされてきた見方、感じ方、考え方、その前提となる価値観や習慣が当然ではないことに気づいていくプロセスであり、別の異なった見方の存在を知る経験である。それは、それまで自覚していなかった自分たちの習慣や文化、また自己に目を開くことでもある。同時に、留学生にとっても、日本人学生の反応に接し応答し合うことで、それまで抱いていたとは異なる日本人学生にふれる経験であり、それまでとは異なった見方やそのような見方の存在を知ることにより別の自己を認識していく経験でもあった。

クラス間交流は、授業という形として構造を与えることで、留学生と日本人学生双方が、出会い、互いに知り合う場として機能する機会となった。それにとどまらず、学生たちは、それまで持っていた認識とは違う見方や感じ方にふれ、自分が変わり、新たに学び合うという内的プロセスを、協同で活動する中で、共に体験していった。その意味で、クラス間交流は、留学生と日本人学生双方にとって、両者が共に学ぶ学び合いの場として機能した。

Ⅳ－３ 反省

異文化交流の観点から学生たちの学びを振り返ると、学生たち自身の変化のプロセスがそのまま異文化を感じ、新しい見方を知るという共に学び合うプロセスであった。受け入れられることは留学生の日本での経験が日本人学生にシェアされることである。その意味で、協同の活動のなかで経験を共有しながら、相互作用して学び合うプロセスのなかで、気づき、学んでいき、それらを両者が、自己の認識の枠組みの中にとり入れていったといえる。しかし、当初、留学生が日本人学生の前でスピーチをすることに抵抗を示したのも、留学生にとって楽なことではなく内面が揺さぶられたからである。そのことはスピーチの成功によって解消された反面、後述するように別な形をとって表出した。

今回のクラス間交流の反省としては、留学生クラス側からは、自分が本当にスピーチしたいトピックでスピーチをすることができなかったという感想がでてきた点である。クラス間交流が、本当に提供したいトピックでスピーチをしたり、そのトピックについて日本人学生と議論したりできる機会となるような交流を摸索していきたいと考えている。

日本人クラス側からの反省材料としては、日本人クラスでもエッセイを書くだけでなく、留学生のようにスピーチでまとめるという方法もあったかのではないかという点である。当該クラスがライティングのクラスであるという枠組みに教師がとらわれていたことと、時間的な制約、他の活動との兼ね合いから実現できなかったことであったが、工夫の余地があったと考えられる。

今回のクラス間交流は、大半の学生が交流の実態のない状況にあったので、クラス間交流自体が新鮮な驚きとして捉えられ、いぶかりや葛藤があってもそれが継続して表面化しにくい段階にあったと考えられる¹⁶⁾。その意味で交流の第一段階を経験できたといえるであろう。しかし、現実には、違い

に接して生じてくるいぶかりや揺さぶり、葛藤と無縁でいることはできない。それらに向き合って議論しあえる環境作りもまた、交流の次段階として避けては通れないし、より豊かな関係が、そこからつくられていくであろう。

V 結びに代えて —授業の可能性と今後の課題—

クラス間交流の試みが、単発でなく学期を通して継続して行われたこと、加えて、学生間の相互作用であるのみならず、同時にクラス間の相互作用でもあったことは、学習する主体である学習者という観点からと、異文化インターフェースとしての授業という観点からいくつかの可能性が提出された。

まず、当事者である学生同士の学び合いという観点からは、前章で見たように、学生たちはスピーチ活動を通じた相互作用のなかで、自身が変わることができ、活気づけられていった。それだけでなく、交流が直接の契機となって、それぞれのホームクラスで語学学習への動機づけが高められ、さらに、授業を超えた、より普遍的なレベルにおいて、異文化交流・理解を学生自身が捉えていくことも可能としていった。それは、両者の相互作用があって始めて可能となることである。その前提として、彼女/彼らが、留学生、日本人学生というカテゴリカルな存在として捉えられる傾向はあっても、その前に、各々が、個人として尊重され対等な人間として交流するという関係がなければ不可能なことである。

次に、授業という観点からみた可能性は以下の通りである。なお、ここでは、授業を、学生が参加を義務づけられているという点と、異文化インターフェースとしての授業という点から捉えている。最初は、クラス間交流という授業形態の可能性についてである。第一に、クラス訪問という活動と、ネイティブの日本人学生がコメントをするという学生同士で行う活動といった授業の形態が、双方にとって新鮮な刺激となったことがあげられる。留学生クラス内で行うスピーチ活動と比べて、同じ活動が、新しい刺激を受けて活発になり、学生もそれによって活気を与えられることが可能である。第二に、クラス間交流の形態として、直接に対面する交流だけでなく、書かれたテキストを媒介したり、ホームページや掲示板、グループウェアなどを利用することにより時間と空間を超えた交流に発展できるし、継続的な交流が可能となる¹⁷⁾。

次は、授業という構造を与えることのメリットについてである。第一は、「教室」を交流の場とする試みとして、それぞれのホームクラスの授業を行いながらクラス間交流をすることが可能であるだけでなく、相互作用の効果として、それぞれの語学クラスの到達目標への動機づけを高めるというホームクラスの教室活動をも活性化させることが可能である。第二は、個別のクラス活動の課題として感想やエッセイ等を課すことで相互交流の内的プロセスをみていくことが可能となる。これは授業のなかで行う交流のメリットである。留学生と日本人学生との交流を授業として取り組むことは、そこでの相互作用のプロセスを漠然と体験するに留まらず、学んでいくという意識的なプロセスとして学生たちが経験していくことが可能である。

¹⁶⁾ 次のような形でいぶかりが表現されている。「私は神様を信じてません。どちらか一つの宗教にしなきゃいけないというのが不思議に感じます。ある宗教を信じてる人から見ると、日本人が変なのかと思うとそれもまた不思議でした。」(HTU)

¹⁷⁾ インターネットを利用した授業交流は学校や国を超えて行うのが通常で、オンラインでしか交流できないが、同じキャンパスで行った場合には、オンラインでもオフラインでも簡単に交流を行える。

最後に、クラスを超えた発展的な可能性についてである。クラス間交流は、それ自体で完結するのではなく、例えば、留学への動機づけを高めたり、さらなる学習機会や交流への刺激となったり、さらに普遍的な認識に至る可能性をも持っている。

このように、異文化インターフェースを目指す授業の試みは、「教室」を交流の場として活用する機会を提供し、いくつかの可能性を提供した。しかしながら、クラス間交流という授業の試みは、とりわけ、一定期間にわたる継続は、実現が必ずしも容易ではない。21世紀にはいって留学生の一層の増加が要請され、交流の推進が求められているが、交流は自然発生的には生じにくく、とりわけ、「教室」が交流の場としてはあまり活用されていないのが現状である。交流がもたらす可能性を視野に入れるなら、授業に学生の参加が義務づけられている点を生かした交流授業のメリットはもっと強調されてもよいであろう。クラス間交流や日本人学生の参加を得て、「教室」を交流の場として活用していく授業がもっと行えるようになるには、そうした交流が可能となる仕掛け作りが検討される必要があるし、仕掛け作りを援助するカリキュラム等、制度面での取り組みも期待される。

おわりに

「留学生の日本語クラスと日本人学生の英語クラスが交流する」というユニークな試みは、まず教師の交流が先にあった。2003年度春、国際学部にて非常勤として着任した2人の教師の出会いは4月の授業打ち合わせ会であった。以来、1週間に1回、授業を通じて感じることを交換しながら、指導科目と指導対象は違っても、外国語を指導すること、外国語を学ぶこと、留学すること、異文化を学ぶことについては、共通の課題を抱えていることがわかり、今回の試みをすることにいたった。振り返ってみて、このような試みは、2003年度秋学期の双方のクラスの条件が合致したから実現できたというのが実感である。この試みでは異文化交流における様々な可能性が見られる。これらは教員側が意図したものではなく、すべて日本語クラスと英語クラス双方の学生たちによる相互作用の結果以外の何ものでもない。

今回の試みで学べたことを2004年度以降のそれぞれの授業改善に役立て、外国語習得、異文化理解、留学生教育、留学の事前教育の観点から、さらなる授業交流を摸索し、研究を深めていきたいと考えている。本稿を終えるにあたって、留学生と日本人学生の双方が、協同の活動の中で精一杯活動し、学び合っていたプロセスに共に参加し得たことは、担当教師にとって大きな喜びであったことを記しておきたい。参加したすべての学生たちに対して、一人一人の学びの経験に拍手を送り、貴重なときを共有できた感謝を伝えたいと思う。

引用文献

天野正治1997『ドイツの異文化間教育』玉川大学出版部

花見槇子1999「国際交流に携わる大学生の質的研究に向けて」『三重大学留学生センター紀要第1号』1-14

花見槇子2000「日本人学生と留学生との交流：対等な関係の摸索（その1）」『三重大学留学生センター紀要』第2号 53-66

花見槇子2003「日本人学生と留学生との交流－サークル、混住寮、授業をとおして－」『留学生交流』

2003.8 2-5

- 井之川睦美2003「体験学習法による日本語と英語を併用した活動－短期留学生日本語コース交流授業交流における試み」『群馬大学留学生センター論集』第3号 39-52
- 箕浦康子代表1998『日本人学生と留学生：相互理解のためのアクション・リサーチ』（平成7年度～9年度科学研究費補助金研究成果報告書）
- 箕浦康子2000「日本人学生と留学生－相互理解の仕掛けをどのようにつくるか－」『留学交流』2000.1 10-13
- 佐藤郡衛1999=2003『国際化と教育－異文化間教育学の視点から－』放送大学教育振興会
- 杉山純子2001「日本人パートナーが参加した『応用会話B』クラス－2000年10月から2001年2月までの実践報告－」『岐阜大学留学生センター紀要』93-106
- 高松里2000『『日本事情』講義を通じた国際理解教育－フィードバックを用いた大集団ディスカッションの試み』『九州大学留学生センター紀要』第11号 15-27
- 田崎敦子2003「日本人学生の異文化間コミュニケーション能力の養成－英語を共通語として行う留学生とのグループワークを通して－」『広島大学留学生教育』7 広島大学留学生センター 45-57
- 得丸智子2000「留学生と日本人学生の作文交換活動における個人心理過程」『日本語教育』106号 47-55
- 坪井健1999「留学生と日本人学生の交流教育」『異文化間教育』13号アカデミア出版会60-74
- 横須賀柳子2003「大学での日本人と留学生の異文化接触」『國士館大學教養論集』第54号國士館大學教養学会21-38
- 横田雅弘1998「インターフェースとしての授業－一橋大学の場合－」箕浦康子代表1998『日本人学生と留学生：相互理解のためのアクション・リサーチ』（平成7年度～9年度科学研究費補助金研究成果報告書） 56-62
- 横田雅弘1999「留学生支援システムの最前線」『異文化間教育』13号 4-18

